

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第94回

観光案内に載らないパリ案内(前)

日曜日と月曜日、たった2日で廻れる、知られざる街中の秘境

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター, 総合研究大学院大学)

今回はいささか趣向を変えて、春休みのための旅行案内。何をいまさら、のパリだが、どうしたわけか、あまり日本の旅行案内書には出てこない穴場をいくつかご紹介してみたい。

パッサージュめぐり

パリ国立美術史研究所は、ヴィヴィエンヌ街のすぐ東側にある。オペラ座から徒歩で南にパレ・ロワイヤルの中庭に下る途中、商工会議所(ブルス)のすぐ近く。ラブルースト設計の国立図書館旧館を右手にして、そのすぐ向かいに存在したパッサージュ(ガラスの天井に覆われたアーケードの通路)を改装したものである*図1。入り口で荷物検査はあるが、出入りは自由。一般公開の講演会なども頻繁におこなわれる。角にはコルベールCorbertという名前の高級なカフェ・レストランが、内装も豪華に開店している。だが、美術史や建築史の同業者は、その隣にある職員食堂でお安く昼食を済ませる。もう一本西のリシュリユー街から入る旧国立図書館のかつての図書閲覧室は、図書館機能は停止して、歴史遺産として保存されている。だが、それと斜向かいの定期刊行物閲覧室が、美術史図書館へと生まれ変わって、はや15年ほど。版画部では展覧会なども開かれる。かつて日参した者の回顧談めくが、鋳鉄建築の歴史遺産、隠れた名所なので、機会があればご訪問をお勧めしたい。

この境界は19世紀後半に発達したパッサージュがいくつも生き延びており、当時の風

情を追体験するにも絶好の散策路となる。冒頭に触れたギャルリー・ヴィヴィエンヌ Galerie Vivienne も、北半分のブルス側は商店街として残っており、丸天井はパリ市内でもいちばん豪華だといわれる。庶民的といつてよいのが2本筋ほど西のパッサージュ・ショワズール Passage Choiseul。200メートルほどの通路に、百軒近くの店が轟いている。

筆者のお勧めはといえば、パッサージュ・デ・バノラマ Passage des Panoramas。ヴィヴィエンヌ街よりもうひとつ東の通路だが、初心者には目抜きブルヴァール・モンマルトル Bd. Montmartre 側から南に入ったほうが分かりやすいだろう。錯綜したパッサージュが残っている唯一の区画といつてよい。手頃な価格の各種料理店が軒を並べ、その間には古本屋、趣味の切手を扱う店、玩具店などが点在して見飽きない。

大通りの北側延長上にはパッサージュ・ジュフロワ Passage Jouffroy が続く。こちらは深夜になると入り口が閉鎖されるが、ドン突きにはオテル・ショパン Hôtel Chopin という小ぢんまりとした宿屋がある。この周辺の雰囲気がお気に入りならば宿泊滞在に値するのが「プチ・ホテル」(フランス語ならプチホテル)。こちらにもレトロな専門店が連なっていて、意外な出物がお手頃な値段で手に入る。一本東にはグレヴァン博物館があって、合わせ鏡の回廊だけでも一見の価値がある。



図1 ヴィヴィエヌ街のパスサージュ 国立美術研究所内

パスサージュ・ジュフロワをさらに北にすすめば、短いパスサージュ・ヴェルドー Passage Verdeauに連絡。時代物のカメラ骨董店や美術書、大工道具の専門店など、最上にする旅人も多いはず。抜けて右手がフォーリー・ベルジェールFolies Bergères。正面のアール・デコの金色の看板は清掃したのか、ばかに小奇麗になってしまったが、エドゥアール・マネ晩年の大作の舞台としても有名だ。じつはこの界限にはシナゴークが多数集まっていて、ユダヤ文化センターもすぐ近く。蛇足だが、夕食のお勧めは、フォーリー・ベルジェールすぐ東向かいの中華料理。湖南料理の専門店で、前日から予約しておけば、毛沢東の大好物だった豚の煮込みも出してくれる。中国人客で賑わっているが、最近やや有名になりすぎて、週末P.M.8:00を過ぎると、予約なしではなかなか空席にありつけない。

パリに隠された日本

凱旋門のあるエトワール広場からは道路が放射状にでているので、ここを起点にすると迷子のもと。南にはイエナ大通りAv. d'Iénaがあって、ちょうど1キロほど下る

と、地下鉄のイエナ駅の正面にはギメ美術館Musée Guimetがある。リヨン出身の化学染料特許保持者の息子の東洋趣味が嵩じて設立された宗教美術館が、現在では国立東洋美術館へと模様替えされている。アンコールワットやその周辺からの石像、仏像の傑作が地上階に展示され、上階には中国、チベット、日本、韓国の展示が、近年更新された。ペリオによる敦煌将来の経典などは著名だが、イエナ大通り13番、ゲート・インスティテュートの隣のAnnexeはほとんど知られていない。普通の邸宅の扉のような入り口を入るが、守衛もおらず入館無料。まず上階に上がるようにと指示がある。そこには19世紀中葉の日本の民間仏教信仰の姿が、当時のままで復元保存されている。なかには、1878年に流失したと推定される、もと法隆寺で阿弥陀如来像の脇侍であった鎌倉期の勢至観音像もある*図2。日本でもお目にかかれぬ骨董品が整然と配列されている。長らくガラクタ扱ひされてきたこれらの像を整理分類したのは、コレージュ・ド・フランス日本文明講座の故ベルナル・フランク先生だった。

階段室に掲げられた法隆寺金堂壁画の複

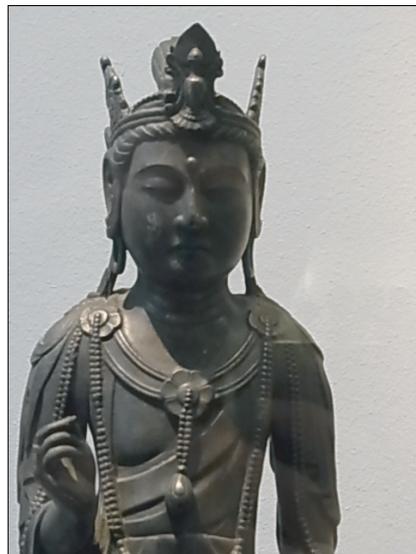


図2 勢至菩薩立像、ギメ美術館別館 12世紀前半康勝周辺の仏師の作と推定



図3 東寺立体曼荼羅複製 山本茂助作成 1878年
パリ, ギメ美術館別館



図4 ギメ美術館別館中庭 茶室 中村昌生設計
2001年 パリ, ギメ美術館

製を見ながら地上階に戻ると、1870年代末に京都の東寺にあった仏像による立体曼荼羅の複製として将来された金無垢の群像が並んでいて、圧倒される*図3。この空間だけ周囲とは別世界の時間が凍結している。さらに中庭に出てみよう。石段をあがると、数寄屋造りの茶室が、八橋を模した石橋を渡した池を背に安らっている。中村昌生氏設計の名品である*図4。パリで真性の日本木造家屋といえ、あとはサン・クルーのアルパール・カーン庭園美術館にある2棟の住宅建築が知られるばかり。

ブランド店を横目で通り越し……

イエナ広場から東にウィルソン大統領大通を歩いてみよう。日曜日には、ここにも午前中、日用雑貨の市が立つ。昼食などは、レストランに入るよりは、こうした市場のお惣菜店で店の人とおしゃべりをしながら立ち食いで、食料品を買い出しに来た市民たちの振る舞いでも観察するほうが楽しい。青空市にそってぶらぶら歩くと、100メートルほどで右手にはパレ・ド・トーキョー（現代美術展示場）、および隣接したパリ市立近代美術館が南側に現れる。国立美

術館は月曜日休館だが、パリ市の美術館は火曜日休館。うまく使い分けすれば、時間の無駄や空振りを避けられる。さらにセーヌ河岸のアルマ広場まで東に進むと、そこから北北東にゆるやかな坂を上るのがモンテーニュ大通。筆者など無縁な有名ブランド店が軒を競っているが、それを1キロほど散策して昇りきると、シャンゼリゼ大通が再び現れる。

このあたりは、クリスマス時にパリを訪れる観光客には、防寒服完備のうえ、夜の散策をお勧めしたい。夜店が歩道にそってところ狭しと並び、家族連れや老若男女で賑わって、欧州の聖夜の雰囲気満喫できる。もちろんスリには注意が必要ですけれど。またイヴまでは盛況だが、25日にはすべて撤去されて閉店することにも要注意。降誕祭の夜は家族と過ごすのが、カトリック國の基本ですから。

さて、凱旋門を遥か西側の背中して、コンコルド広場に向けて右手に折れると、200メートルほどでクレマンソーClémenceau広場。そこを南に再度折れると、前方には絶景が開ける。右側にガラス張りの広大な丸天井が広がるグラン・パレGrand Palais。

左側には、見事な大理石のファサードをもつプティ・パレPetit Palais。歩行者はこの両側面の威容を眼にしつつ、南へと進むこととなる。ともに1900年の万国博覧会のおりに、旧・工業館Galerie des machinesを取り壊して新設された展示会場であり、その先のアレクサンドル3世橋を渡った左岸が、万国博覧会の主会場となった。南方向遙かには、ナポレオンの遺骸を埋葬したアンヴァリッドInvalidesの円蓋が金色に輝いている。夏目漱石が「銀座を百倍ほど立派にしたような」と僻み半分の叙述を残したのが、このあたりからの眺め、ということになる。観光バスでの周回では、なかなか位置関係が掴めない。自分の足で歩いてみると、はじめて祝祭空間に納得もゆくことだろう。

行ってびっくりプティ・パレ地下の充実

ここでご紹介しておきたいのが、プティ・パレ。小宮殿という名前のせいか、なかなか観光では訪れにくいのだが、実は隠された大穴場。まずここでの特別展は、お隣のグラン・パレと並んで必見だろう。こればかりは事前に現在の催し物を確認しておくしか方法がない。国立美術館連合の催し物会場でもあるグラン・パレの特別展の場合、人気のありそうな出し物となると、事前予約券などの発行となり、これは当日では入手不可能なので、現場に参上しても、巨大な建物を半周する行列ができていて、3時間待たされた、といった羽目になりかねない。唯一有効な予防手段は、『あいだ』読者であるならば、国際美術批評家連名の会員証を事前に入手しておく、といったことになるのだろうか。売店側から堂々と入場して、空いたところで入場券を購入する個人技が効く会場もないではないが（これは、内緒ながら、オルセー美術館では有効な合法的手段）、グラン・パレでは構造上、無理だろう。

プティ・パレの特別展は、中央入り口から入って右翼奥で催されるのを通例とする。グラン・パレのような長蛇の列ということは少ないが、一生の記念になるような精選

された特別展も少なくない。近年のものに限ってみても、スペイン近代の巨匠ソロラ Sorolla、イタリアの日本趣味の画家、パリで人気を博したジョゼッペ・デ・ニッティス Giuseppe de Nittis、この春もロマン派東洋主義の申し子というべき Felix Ziem と、日本での知名度はいまひとつながら、重要な回顧展が開催されており、これらの特別展を行きずりで観て、決して損はすまい。

とりわけお見逃しなく、と申し上げたいのが、近年改修のなされた半地下展示室。膨大な収蔵品のうち、19世紀後半から世紀末を中心とした絵画のみならず、装飾美術、室内家具の復元などが一挙公開されている。一例だけあげれば、マネと同時代のジェイムズ・テイソの《放蕩息子の出発》*図5はヴェネチア似た空想の港を舞台とし、《放蕩息子の帰還》は、ディジョンあたりだろうか、内陸の庄屋の邸宅に尾羽打ち枯らした息子が帰宅するという趣向の対作品。だが後の三幅対で、日本趣味にかぶれた画家は、放蕩の行き先を日本に設定し、巖島神社のような水辺の御殿で、シルクハットの西洋人の青年が藝妓の娘にまわりつかれ、和服の舞妓たちが列を成して踊る姿を見る、夜の



図5 ジェイムズ・ティソ《放蕩息子の出発》1863年（部分）パリ、プティ・パレ美術館

図6 パリ、プティ・パレ美術館、
左翼端地下と地上階を繋ぐ螺旋階段



宴の光景を描いた作品を残すことになる。これと平行する地下の別の回廊には、16世紀クレタ島のギリシア正教イコンの見事な蒐集が列を成しており、これだけでも半日では見尽くせない。スペインで活躍したエル・グレコのイコン画家としての出発点が、ここに明確に確認できるからだ。ともすれば一階左翼の常設展示をさっと見て、これで終わりかと思ってしまう観衆が多いので、敢えて申し上げる次第。ちなみに有名なサロン・ドートヌヌは、ここプティ・パレの半地下で産声を上げた。

とともにプティ・パレで見落とせないのは、宮殿の室内意匠。楕円形の階段や天井への装飾*図6.7, さらには19世紀末の最後の公式画家たちが腕を振った大壁画が輝いている。ながらく印象派史観の影響で軽蔑されてきた作品群だが、第三共和政下での公共装飾の実態を追体験するには、プティ・パレが最良の空間だろう。その先には、クールベの大作群が列をなし、その大回廊の側面の回廊には、ロココ以降の宮廷の室内装飾をたくみに復元した展示が臨場感も豊かに展開されている。フォンテーヌブローやヴェルサイユでの実物よりも、観覧するにはこちらのほうが空間に余裕があって豊かな気持ちを満喫できる。さらに季節と好天とに恵まれれば、中庭での昼の

一休みをお勧めしたい。寛げる中庭ということならば、ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館の、浅い池を設えた中庭と双璧をなす。最後に、左翼突き当たりの円蓋下の広々とした売店は、書籍、贈答品とも充実している。オルセーやルーヴルの売店の態度の悪い店員とは比較にもならず、応接は遥かににこやかだ。

(次号に続く)

*写真はいずれも筆者撮影。



図7 パリ、プティ・パレ美術館 地上階、左翼および天井画(コルモンによる)